

## &lt;前回&gt;シュライアマハー

## (1) シュライアマハー(Friedrich Ernst Daniel Schleiermacher, 1768-1834)の特徴

## 1. シュライアマハーとはいかなる思想家か

- ①近代プロテスタント神学の父
- ②啓蒙主義的な神学的合理主義と伝統主義との間・総合
- ③解釈学・弁証法・倫理学、体系家 → 信仰論(『信仰論』(Glaubenslehre))の影響  
Dogmatik から Glaubenslehre へ  
自由主義神学

↓

- ・人間性における宗教 → 弁証神学、宗教の本質概念(本質論から現象論へ)
- ・実定性 → 個別的で歴史的な諸宗教への定位 cf. 理神論  
高次の實在論  
説教者

## (2) 『宗教論』の信仰概念

『宗教論』(筑摩書房)

- 第一講 弁明 宗教批判
- 第二講 宗教の本質について 宗教本質論
- 第三講 宗教へ導くための教育について
- 第四講 宗教における集団について あるいは教会と聖職について
- 第五講 さまざまの宗教について 宗教的多元性

## 2. 信仰・宗教の規定：宗教の独自性－宗教学の基礎、宗教哲学

## 3. 形而上学・倫理学との区別

宗教の本質について(宗教本質論・第二講) → 「直観・感情」(「本質－現象」の枠)

- ①形而上学と道徳から区別された「宗教」の固有性
- ②直観と感情 → 人間存在
- ③直観：有機体的な統一な宇宙、スピノザ的  
無限と有限という関連性 → 表現、象徴
- ④感情「それは多様性と個性とを象徴にした無限で生きた自然という根本感情」「無限  
に向かう憧れ、無限に対する畏れの心」「内なる本性の呼び掛け」

## (3) 『信仰論』の意義

## 4. 教義学の新しいスタイル

- ・経験から教義へ
- ・諸学の体系内における神学の位置づけの明確化  
倫理学、宗教哲学、弁証学からの借用命題から神学本論へ  
「神」という言葉の規定

## 5. 『信仰論』序説(Einleitung)

## 6. シュライアマハーの議論のアウトライン

「教義学・教義→教会・信仰共同体→敬虔さ→感情・直接的自己意識→絶対的依存感情」

- ⑦自己意識の現象学は、他なるものとの関わりを介して、現存在の現象学へと展開される。
- ・自己意識の分析＝世界の内における自己の存在の在り方、我々の現存在の分析へと至る。  
自己意識の構造の現象学的記述から、世界内における現存在の現象学的記述へ。
- ・世界：  
自己の存在は他から触発された受容性において成立し、常に他(人間的社会的関係や天体を含めた自然との関係)との相互作用の内存在している。

もろもろの他なるものが一なるもの(Eines)として、つまり外部世界全体が我々自身と共にある一なるものとして措定されるとき、それは世界と呼ばれる (ibid., S.26)。

↓

我々の自己意識は世界の内における我々の存在の意識、あるいは我々と世界との共存の意識として成立。

注意すべき点：20世紀の現象学的存在論（シェーラー、ハイデッガー、ティリッヒラを含めた）と表面的に類似性。自己意識が「我々」の意識として説明されていること。個的自己の意識ではなく、共同体的自己の意識が論じられている。

↓

シュライアマハーの信仰論が彼の言語論やコミュニケーション論との関わりで理解されねばならない。 cf. フッサールの意識の現象学

⑧自己との相関性において、自己の起源は神として定義される。

・世界内の他者との関係：ここには絶対的依存感情は存在しないこと。

・敬虔さ＝絶対的依存感情：自己と神との関係。

しかし、特定の神観念——たとえ人格神であろうと——を前提にしていない。

「我々の自己意識において共に措定された、我々の受容的で自発的な現存在の起源(Woher)は、神という表現によって言い表されねばならない」(ibid., S.28f.)。

まず、特定の神観念から、その神が現存在の起源であると主張するのではなく、むしろ反対に、現存在の起源の方が「神」と呼ばれるのである(神の定義)。

7. 伊藤慶郎『シュライアマハーの対話的思考と神認識——もうひとつの弁証法』

晃洋書房、2013年。

## 9. 宗教批判の系譜 1 — フォイエルバッハ

1. 現代キリスト教を規定する問いとしてのフォイエルバッハ問題

フォイエルバッハの宗教批判は避けて通れない

源泉は古代ギリシアの哲学的神話批判、人間が想像した神・神人同型論

→マルクス、ニーチェ、フロイト、キルケゴール

2. フォイエルバッハの宗教批判の二つの前提

①人間の類的本質の無限性

②類的本質の外化(=表現、疎外、投影)

3. 「宗教は動物に対する人間の本質的な区別に基づいている——動物は宗教を持たない」

個体としての自分や他者の意識+類的存在としての人間(人間性)の意識

4. 人間の本質あるいは類(あるいはいわゆる人間性): 理性、意志、心情

5. 類としての理性そのもの(種あるいは類としての人類)の無限性

6. 人間は自らの活動を通して自己を自分自身から区別された客体として措定する(外化あるいは疎外)→「対象の意識は人間の自己意識であり」、「対象は人間のあらゆる本質であり、人間の真実にして客観的な自我である」

7. ヘーゲルの意識論: 「主観的精神→客観的意識→絶対精神」

8. バーガー、ルックマンの知識社会学:

外化(表現・創造)→客体化(制度化・実体化)→内化(社会化・自己同一性)

芦名定道、小原克博『キリスト教と現代——終末思想の歴史的展開』世界思想社。

バーガー=ルックマン 『日常世界の構成』新曜社。

バーガー 『聖なる天蓋——神聖世界の社会学』新曜社。

ルックマン 『見ない宗教——現代宗教社会学入門』ヨルダン社。

9. 「他者は私の汝であり……私の他なる自我である。それは私にとって対象化された人

間、私の頭わにされた内面である。すなわち他者は自分自身を見る目である。私は他者においてはじめて人間性の意識をもつ。他者を通してはじめて、私は私が人間であることを経験し感じるのである」

「孤独は思想家の欲求であり、共同は心情の欲求である。人は一人で考えることができるが、愛することができるのはもっぱら二人でなのである。愛においてわれわれは他者に依存している。」(上 163)

↓

我と汝、対話的思考

10. 「宗教は無限者の意識である。したがって宗教は人間が自らの無限の本質についても意識であり、かつそれ以外の何ものでも在り得ない」。「神の意識は人間の自己意識であり、神認識は人間の自己認識である」
11. 「神は人間の鏡である」、「神学の秘密は人間学である」
12. 宗教：人間の本質を人間の外に存在する超越的なもの(=神)として措定→偶像崇拜  
「神を富ませるために、人間は貧しくならねばならない」、「神が主体的であればあるほど、人間はよりいっそう自分の主体性を疎外する」
13. 哲学の課題：このような神と人間の対立が類的本質としての人間と個人としての人間の対立であることを暴露することであり、人間から疎外された人間性を人間の側に取り戻すことなのである
14. 宗教批判(疎外克服のプロセス)は宗教自体に内在するメカニズムである。

先行する宗教への批判は、当初は無神論とされた。

ヘレニズムの諸宗教とキリスト教

「宗教の発展行程」「人間はますます多くの神を拒否し、自分自身を承認することがますます多くなるということ」(上 100)、「始めは人間は万物を区別なしに自分の外におく。このことはことに啓示信仰のなかに現われている。後の時代または開けた民族に対しては自然または理性が手渡しするものを、前の時代またはまだ開けていない民族に対して神が手渡しする。」(100-101)

「キリスト教は内面的な道徳的清浄を外面的な肉体的清浄から分離し、イスラエルの宗教は両者を同一視した。キリスト教はイスラエルの宗教とは反対に批判と自由との宗教である。イスラエル人は神に命じられたこと以外には何をする勇氣ももたなかった。」(101)

「キリスト教はイスラエル人が自分の外に神のなかへおいたものを人間のなかへおいたのである。」(101-102)

「イスラエル人に対してはキリスト教徒は教義を信じない人であり自由思想家である。」  
「事物はこのように変化する。昨日はまだ宗教であったものは今日はもはやそうではない。そして今日無神論と認められているものは、明日は宗教と認められるのである。」(102)

#### 15. 批判的コメント

##### ①フォイエルバッハによって批判された神

人間の無限の類的本質が人間と対立するものとして人間の外に投影されたもの  
→人間は無限な自らの本体的人間性の実現を妨げられる、人間のエゴイスティックな幸福衝動の素朴な実体化

最高存在あるいは最高価値として措定された神(形而上学的存在者としての神)  
バルト「フォイエルバッハの鋭い感覚は正しい」

「神——少なくとも宗教の神——に対する信仰が失われて行くのはただ、懐疑論・汎神論・唯物論の場合がそうであるように人間——少なくとも宗教において認められているような人間——に対する信仰が失われるところにおいてだけである」、「人間を否認することは宗教を否認することである。」(122)

宗教で問われているのは人間であり、この連関を主題的に取り上げたのが  
フョイエルバッハである（議論はカント・シュライアマハーに発端をもつ）。

②人間の類的本質の無限性の根拠

「個別的には人間の力は制限されているが、結合されると無限の力となる。個々  
人の知は制限されているが、理性は制限されておらず、学も制限されていない。  
なぜなら、それは人類の共同行為だからである」

→近代人の「信仰」（無限の進歩）＝楽観主義・ヒューマニズム

③現代の宗教的・神学的思想は人間の疎外の克服、人間の本来的可能性の実現について  
どのように考え、どのように答えているのか

→「投影のメカニズム＝人間の本性」ならば、フィクション機能の積極的意味こ  
そが問われるべきである（ユートピア精神の意義）

④フョイルバッハの宗教批判→マルクスの無神論的な宗教批判（非宗教的宗教批判）  
→キルケゴール的な有神論的な宗教批判（宗教的宗教批判）

<参考文献>

0. 芦名定道 「キリスト教神学と宗教批判」(『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版)
1. フョイエルバッハ 『キリスト教の本質』岩波文庫。
2. 松丸壽雄 「宗教批判の行方」(大峰編 『神と無』) ミネルヴァ書房。
3. パネンベルク 「無神論の諸類型とその神学的意義」(『組織神学の根本問題』)  
日本基督教団出版局。  
『人間学』教文館。
4. レーヴィット 『ヘーゲルからニーチェへ』岩波書店。
5. 半田秀男 『理性と認識衝動－初期フョイエルバッハ研究－』溪水社。
6. 深井智朗 『アポロゲティークと終末論 近代におけるキリスト教批判とその諸問題』北樹出版。